東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

日本人として,
中国・大連の地で育つ子どもたちの学校教育：
グローバルな子どもたちを育成するために

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉野,正美
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174217

日本人として，中国・大連の地で育つ子どもたちの学校教育

―― グローバルな子どもたちを育成するために ――

前大連日本人学校　教諭
埼玉県入間市立豊岡小学校　教諭　吉　野　正　美

キーワード：現地理解，文化交流，言語活動，家庭教育

１．はじめに

グローバルとは，一体何だろう。教育現場で言うならば，どのような子どもたちを育てることなのだろう。自問自答してみても，答えは見つからなかった。大連に派遣が決まり，地図を開いてみる。目と鼻の先の中国。この地で，自分にできることは何かを考えた。隣国でありながら，中国の事情には精通していない。今回の派遣を通して，自分自身が日本人として，中国を見つめることで，日本を再認識したいと考えた。そうすることが，グローバルな教育の鍵を見つける第一歩だという結論に達した。

２．現地事情

(1) 風土

社会主義体制を保ちながらも，資本主義市場原理を取り入れ始め，時代の大きなうねりの中にいる中国。その中でも外資企業の進出が頻繁な大連の変化は著しい。大型店舗が毎日のように新装開店し，数ヵ月で品揃えや街の景観が一変してしまうほどである。街行く人は，色彩豊かなファッションに身を包み，商店には物があふれている。

大連は日本人に馴染みのある土地柄で，対日感情は良い方である。日本人として，普通に生活し，相手を尊重する態度で接していれば，友達「朋友」として家族以上の付き合いができる。中国人の性格として，人を敬い，家族を大切にする信念からも，接し方一つで付き合い方が変わると言っても過言ではない。

(2) 現地校視察

学習中の様子から，子どもたちが教師に従う主従関係が成立していることが分かる。そのため，安定した一斉指導ができる。教師の教材研究は目を見張るものがあり，自作の課題設定は児童の興味・関心を掻き立てられるものだった。既習事項との関連もあり，洗練された学習内容が組み立てられていた。子どもたちは，パズルやブロック等の作業の扱いに熟知しており，算数的活動を活発に行っていた。グループ作業や話し合いなど，普段から学習形態を工夫して授業していることも分かった。グループ内には理解力の高い児童がおり，互いの教え合い活動も可能であることも考えられた。現地理解研修で参観した長春路小学校は，学校内で教材研究に力を入れており，ICT 機器を器用に活用できる教員が多い。校内研修の充実さをうかがい知ることができた。また，互いに授業を見合うことで授業力を高め，更には，教師としての実績を積むための試験があると聞いた。教師の力量を高める場が，学校の運営として十分に備わっていることが分かった。

(3) 教科書比較

近年，中国の経済成長は世界中からも注目されるほど，目覚ましいものがある。中国の経済発展と共に重要視されているのは，世界で通用する学力である。中国の学力は日本の学力より上回っているという報告もある。そこで，両国の教科書の比較と教育課程の比較を行うことにした。そうすることで，なぜ中国がこのように学力を上げてきたのか知る手掛かりとなるのではないかと思ったからだ。以下，調査に於いて，日本と中国の教育内容や違いが分かり，いくつかの結果と疑問点が浮かび上がった。

① 教科書比較の結果と疑問点

・中国の数学（算数）の教科書は，学習内容が多い。

⇒内容が多いことで，算数の概念について基礎基本が定着できているのか。

・授業日数と授業時数から考えても，中国での授業進度は日本より速い。

⇒学習内容に即した習熟問題がなされているかどうか，懸念される。

・小学生の段階から文字式を扱うことは，つまずく子どもたちが増えるのではないか。

⇒学校での教育活動内で，個に応じた対応ができているのか。

② 教育課程・学習指導要領の比較からの考察

・子どもたちの発達に着目する教育目標の内容においては，共通している部分が多い。

・中国の知識・技能偏重の教育を是正する動きに対し，日本では，基礎・基本的知識・技能の確立が目指されている。

・中国は，今までの詰め込み教育の反省から学習者の創造力・実践力などの能力の育成を狙いとしているのに対して，日本は，児童の興味関心を生かし，自主的・自発的な学習が促されるよう工夫されることを目指している。

・評価方法については，中国は教師自らが指導を振り返り，子どもたちに対しても細かく評価することが求められている。

加えて，家庭の教育に対する関心も高く，就職を考えた英才教育も進んでいることが分かった。このように異なる教育を受けている子どもたちに対して，主体性をもたせる学校間交流をさせるには，どのような取り組みをさせるとよいかが課題ともなった。

３．現地交流

(1) 中国文化理解学習

４年生の担任をした際，切り絵や墨絵を現地の先生に学ぶことで文化体験をさせた。当時，中国にいながら，中国の文化に触れている子どもが少なかったためでもある。活動中，子どもたちは真剣そのもので，作品作りに夢中になって取り組んでいた。感想発表の場面では，「体験することで，中国のことが少し分かったような気がする」「今日，体験したことを家族にも伝えたい」などの感想が聞かれた。さらに，私自ら中国の彫刻の技術を習得し，実際に子どもたちに教えることで，日本の彫刻と中国の彫刻の違いやその面白さを伝えることができたと実感している。

中国文化理解学習　切り絵を学ぶ様子

(2) 現地校との交流

大連日本人学校では，互いの学校へ出向き，年間２回の文化交流を行っている。現地校との交流担当となった際，互いの国を知り，互いの学校について知ることから交流を始めることを子どもたちに意識させた。現地校である長春路小学校との事前打ち合わせでは，交流担当の意図を先方に理解していただき，計画を進めることができた。様々な交流を積み重ねることで，子どもたちの情操教育に互いを思いやる心が育ち，将来を担う子どもたちに国を越えた国際感覚を植え付けられるということを強く伝えた。

日本の昔遊び体験交流

中国の文化体験では，日本では味わえない体験に興味深い様子だった。大連日本人学校の校舎内を回りながら昔遊びや体験を行う校内オリエンテーリングでは，先方の教師や子どもたちにも好評で，体験活動を通した交流が効果的だったことが分かった。また，教師同士の交流を進め，公開授業や

運動会参観，食事会など，積極的に教師間交流も行った。子どもたちの交流だけでなく，交流を計画する教師自らが一人の人間として，日本人として交流することが，互いを理解し合える第一歩となるということを確信した。

(3) 中日友好学友会との交流

日中関係が心配される中，例年行っていた学友会との交流会は，是が非でも行いたい交流事業だった。打ち合わせの段階から，中国側の担当者に日中国交正常化40周年記念として，記念となる交流としたいことを伝えた。日本と中国の絆について，これまで学んできたことを相手に伝えることを学習のめあてとし，教師間で共通理解を図りながら取り組んだ。低学年は，日本の文化紹介と体験交流，中学年は，日本の曲を演奏し，高学年は，総合的な学習の時間で学んだ現地理解学習から得たことや修学旅行から見えた平和学習の報告や発表を行った。これは，現地の有名大学の教授も大変興味を示し，今後も平和的交流を進めていきたいと意思を示していた。

４．言語活動を充実させる授業研究

新学習指導要領が施行され，大連日本人学校では，研究主題を「自ら考え，豊かに表現できる子どもの育成」とし，校内研修を３年間行った。日々の教育実践を検証し，言語活動の充実と改善を図る研究を積み重ねた。

(1) 言語活動の充実を図る授業実践

近年，保護者や身内が中国人であることが理由で，編入学する子どもの中には，日本語能力が不十分で，会話や学習に問題を抱えている子どもも少なくない。このような状況から，国語を基礎とした言語活動に課題が見えてきた。そこで，国語科を基本として，各教科の特性や学校行事を生かした授業実践を行うこととした。

１年生の担任をした際，国語科における基礎・基本の定着を図るために，視写（詩や物語，説明文の書き写し）・暗唱（音読カードの活用・宿題による保護者の協力）・読書や読み聞かせの啓発（昔話や絵本の読み聞かせ：教師やボランティア）・掲示物の工夫（ひらがな表・片仮名表）を行うことで，日常的に美しい日本語に触れられる場づくりをした。また，話す・書く活動を通して，学習の楽しさを味わう授業実践を行った。導入では，読み聞かせや言葉あそび歌などの紹介を行い，美しい言葉に触れさせたり，楽しい学習環境作りをしたりした。展開場面では，ペア学習や言葉あそびなどのゲームを取り入れ，楽しく言葉を使う活動を増やした。終末では，感想発表や習熟を行い，学習後の余韻を味わわせるようにした。これにより，「もっと，言葉あそびをしたい。」「友達に読み聞かせをしてあげたい。」など，言葉や言語活動に対する興味関心が高まった。

(3) 家庭教育

海外で生活するからこそ，日本人としての意識を強くもたせることは大切である。特に，家庭での子育てにおける母親の感情は，子どもたちの感性に大きく関係していることも日々感じていたことだった。小学部主任となった3年目，入学説明会や教育課程説明会など保護者に学校教育を説明する場をいただいた。正しい日本語を使う日本人に育てるためには，家庭教育が重要であることを，中国人母にも分かりやすいように図や絵で示した。また，個別面談や懇談会を通して，日本の子育て事情や教育事情など，求められている力について詳しく説明した。日々の学級だよりでは，基本的な生活習慣やしつけの仕方など，日本人として身に付けて欲しい家庭教育の内容を発信した。

(4) 学習発表会

大連日本人学校では，外国語活動も活発に行われ，小学部１年生から中国語と英語の授業を週１時間ずつ行っている。学年に応じて，習熟度別クラスを設置し，子どもたちの語学能力に合わせた授業を行っている。

本校で毎年行われる学習発表会では，母国語の日本語の他，中国語，英語を使った台本を作成した。日本人として日本語を大切にしながら，なおかつ，多様な言語を使うことに貪欲な子どもたちに育って欲しいという思い

から設定した内容でもある。台本は，国語「大きなかぶ」・英語「はらぺこあおむし」が基本となっている。振付や演技の練習の中で，多言語を使う子どもたちが自分たちで自然な言い方に変えるなどして，表現力を高めていった。主体的に体を動かしながら，意見を出し合う姿は，たくましい日本人そのものだった。

４．おわりに

現地を知り，受け止め，日本人としてどうとらえていくのか，そして，どのように交流していくのか，このプロセスが３年間で学んだ国際交流の基本である。グローバルな教育とは，言語を手段として，自己を主張しながら互いを理解し合う子どもたちを育成することではないかと感じた。大連での貴重な経験は，多くの方の支えがあったからこそだと感じている。今回の派遣で学んだことを，埼玉の教育に活かしていくことで還元したい。